

保育士養成における施設実習研究の現状について

About the present condition of research of institution
training in nursery teacher training

橋本好広

Yoshihiro Hashimoto

はじめに

近年、保育・子育てをめぐる状況はめまぐるしく変わり、人々の保育・子育てに対するニーズも多様化している。その原因を一言で表すことはできないが、わが国の社会構造や経済状況、国民の価値観の多様化等が、複雑に影響しあっていることは容易に想像がつく。そのような状況下で生活している子ども達のなかには、劣悪な状況に置かれてしまう場合もある。児童虐待や子どもの貧困などはその際たるものである。このような現状に対して、最後の砦となる体制が、社会的養護の各種施設（以下、施設と記す）であろう。その施設のなかで、最前線で子どもと向き合っている専門職が保育士である。

一方で、施設で働くことを想定して保育士養成機関の門をたたく学生が、一体どの程度いるのだろうか。施設は、保育所と比較し、保育士を目指す学生にとって身近な存在とはなっていない。この点に関して、河野の「保育士は保育所で働くという強いイメージをもって養成校へ入学したものが多くことや、保育士養成校において行われる実習に施設実習があるということを入学した後に初めて知る者が多い」¹⁾に代表されるように、多くの研究者によって指摘されている。したがって、現在の保育士養成課程で必修化されている保育実習Ⅰや選択必修である保育実習Ⅲの存在は重要である。なぜならば、学生が保育士の幅広い専門性を理解する体験であり、職業選択として施設で働く保育士（以下、施設保育士と記す）をイメージする重要な機会でもある。またそれは、施設保育士の質を向上するための第一歩へともつながる。

そこで重要となってくるのが、保育実習に向けての事前事後の指導をおこなう、保育実習指導である。従来の保育士養成課程では単位上は実習と実習指導が一体となっていたが、現養成課程ではこれらが分離して独立して単位を与えられている。清水らは、「保育実習の中に含まれていた実習指導に単位が与えられるように改定されたことで、よりいっそう実習の指導内容に重きがおかれ、効果的な教育の工夫に焦点が当てられるようになるであろう」²⁾と、保育実習指導の重要性を指摘している。

著者自身も保育実習指導を担当する者として、どのような準備をして学生を送り出し、質の高い施設保育士を育てあげられるのか探求している状況である。

そのために、本研究では、保育所以外での保育実習（以下、施設実習と記す）や保育実習指導に関係する研究の現状の到達点を確認する。そのための方法として、施設実習の領域で発表された先行研究のレビューをおこなう。

研究対象

2013年9月27日に、国立情報学研究所の論文データベースであるサイニイ（以下、CiNiiと記す）で、「保育」「実習」「施設」の順番で打ち込み論文検索をおこなった。その結果、163本のヒットがあった。この163本の研究タイトルを確認した結果、本研究とは無関係な研究も含まれていることが判明した。その数は、26本であった。したがって、その26本を除く、137本の研究を対象とする。

分析の視点

本研究課題に即し、①発表媒体、②発表年、③調査対象、④研究目的の4つの視点から分析をおこなうことにした。

結 果

1. 発表媒体について

発表媒体が、①研究者の勤務する組織内で発表や出版されたものか。または、②研究者の勤務する組織外で発表や出版されたものなのかで区別した。その結果、①は113本、②は24本であった。

2. 発表年について

発表年の古い順に、1977年1本、1979年1本、1982年1本、1983年3本、1984年1本、1987年1本、1989年1本、1990年1本、1991年1本、1993年5本、1994年2本、1995年1本、1996年3本、1998年4本、1999年3本、2000年1本、2001年4本、2002年8本、2003年5本、2004年4本、2005年5本、2006年2本、2007年13本、2008年20本、2009年10本、2010年13本、2011年10本、2012年8本、2013年5本となった。

3. 調査対象について

137本の研究のうち、表題のタイトルやCiNiiでの本文のプレビューをおこなった。その結果、明らかに調査対象が、例えば発表者の所属校の学生や実習先など、発表者の所属する組織に関係する調査対象と思われる研究成果が52本あった。

4. 研究目的について

137本の研究の研究目的の確認をおこなった。方法として、調査対象と同様に、研究のタイトルやCiNiiで研究論文プレビューをおこない分類を試みた。研究テーマが複数領域にまたがるような研究も見受けられたが、著者が判断して、主たるテーマを1つに限定し分類をおこなった。結果、10分野にカテゴリーを分類できた。その10分類とは、教育内容、子ども観、自己評価、実習効果、実習体制、実習前意識、尺度開発、データベース、リスクマネジメント、歴史である。以下、各々の分類を説明する。

教育内容は、26本が分類された。ここに集められた研究は、保育実習指導をどのようなカリキュラムで進めていくべきかに主眼が置かれたものとなっている。さらには、実習生が実習中に必要とされる、資質や技術について検証した研究もここに分類した。

子ども観は、4本が分類された。ここに集められた研究は、保育士を志す学生が、子どもに対しどのような意識を持っているかを明らかにすることに主眼がおかれたものとなっている。

自己評価は、13本が分類された。ここに集められた研究は、実習終了後に、何らかの尺度を用いて実習生に自己評価をしてもらい、その自己評価を分析したものとなっている。下記の実習効果に分類できるものでもあるが、研究タイトルや研究論文プレビューから、分析のツールに学生からの自己評価を使用したと明記してあるものを集めた。

実習効果は、34本が分類された。ここに集められた研究は、施設からの評価表や学生からの聞き取り等を用いて、実習終了後にどのような変化が学生にもたらされたかを検証しているものである。

実習体制は、24本が分類された。ここに集められた研究は、養成校と実習施設との連携の在り方や、スーパービジョンの体制に主眼がおかれたものとなっている。

実習前意識は、24本が分類された。実習前に、学生が実習に対しどのような意識や心構えしているかを検証しようとするものになっている。

尺度開発は、3本が分類された。ここに集められた研究は、実習先が記載する実習評価表の開発や、実習後に使用する、学生の自己評価表の開発をテーマにしたものである。

データベースは、2本が分類された。学生ごとの実習に関わるデータを、教員間での情報共有や情報更新の利便性を目的に、電子化しようとする試みをまとめたものである。

リスクマネジメントは、2本が分類された。ここに集められた研究は、実習前に学生が抱えるストレスや危険因子を明らかにしようとするものである。

歴史は、5本が分類された。ここに集められた研究は、保育士養成課程のなかで施設実習の位置づけがどのような変遷をたどってきたのかを検証したものである。

考 察

1点目として、今回レビューをおこなった研究の多数は、研究対象者が、研究者の勤務する教育機

関の学生やその学生の実習先であることが多い。これは、研究者の問題意識が、教育者として実習教育を向上させようとするものの表れである。したがって、各研究からは各々の教育機関が抱える課題をあぶりだせる結果となり、保育実習指導の質を向上させる役割を果たしていることが分かった。したがって、本研究で明らかにさせた研究目的の10個の分類も、保育実習指導につながるネーミングとなった。

一方で施設実習の事前事後指導の分野においては、各養成機関を超えた普遍的な研究内容になっていないともいえる。したがって、例えば、今後の保育士養成教育の実習教育の在り方とはどのようなものなのかといった、普遍的な課題には答えきれない。現在に至るまで、保育士養成課程は幾度の改定を試みているが、その際に、施設実習の教育に関して何をエビデンスにして指針を定めたのか検証の必要性があることが判明した。

2点目として、発表年度が2007年から2011年までの期間が、特に多いということである。このことについて、著者は、政策動向と関係があるのではないかと推測し分析をおこなった。

表1は、発表論文数と、2000年以降の保育士養成カリキュラム、全国保育士養成協議会、児童福祉、社会的養護、保育所、教育（幼稚園）の主だった動向との関係を示したものである。結果として、明確には政策動向との関連性は見受けられなかった。次に、CiNiiでプレビューが可能な研究論文から、研究動機の確認をおこなった。結果、研究動機は、大坪らの「この実習に関する調査研究は、保育科の実習指導担当者として、学生が意欲をもって実習を体験し十分な達成感や満足感を得ることができるようにとの願いから」という記述に代表されるように、研究者自身が授業を担当することにより研究動機が生まれたという趣旨が多々あった。

まとめ

本研究は、保育実習のなかでも、特に施設実習の研究の現状を整理しようとするものである。その方法として先行研究のレビューをおこなった。本研究から得られた結論は、この分野における研究が、研究者自身の個人的な問題意識や、研究者の所属している教育機関の問題意識から開始されているということである。つまり、この領域における、普遍的な成果や課題は発見できていない状況である。

今回の研究では、CiNiiでプレビューが可能な範囲での研究となった。したがって、この研究で得られた結果は、極めて限定的なものである。今後は、プレビューが不可能だった研究の内容についても検証をおこなっていくことや、プレビューがおこなえた研究についても、再検証していかなくてはならない。その他にも、CiNiiにはデータベース化されていない研究が存在する可能性もあり、その確認も必要である。また、各研究結果を検証し、共通点が存在するののかという検証も必要である。さらに、根本的な課題としては、全国的な研究を行い、普遍的な取り組みをおこなうことが必要である。

表1 発表論文数と各分野における政策動向

西暦	年号	研究 本数	保育カリキュラムの動き	全国保育士養成 協議会の動き	児童福祉の動き	社会的養護の動き	保育所の動き	教育（幼稚園）の動き
2000年	平成12年	1			社会福祉法の制定 児童虐待の防止等に関する 法律の制定		保育所保育指針の改定・ 施行	
2001年	平成13年	4			児童福祉法改正（保育士の 国家資格化）			
2002年	平成14年	8		【効果的な保育実習の在り 方に関する研究Ⅰ-保育実習 の実態調査から】発行				
2003年	平成15年	5	保育実習Ⅱ、Ⅲの選択必 修化		児童福祉法改正 少子化対策基本法制定 次世代育成支援対策推進法 制定	社会保障審議会児童部会 【児童虐待への対応など 要保護児童及び要支援家 庭に対する支援のあり方 に関する当面の見直しの 方向性について】発表		
2004年	平成16年	4		【効果的な保育実習の在り 方に関する研究Ⅱ-保育実習 指導のミニマムスタンダー ド確立に向けて】発行	児童福祉法改正 発達障害者支援法制定			
2005年	平成17年	5			児童福祉法改正 障害者自立支援法制定			
2006年	平成18年	2			児童手当法改正 児童扶養手当等の支給に關 する法律改正			教育基本法改正 認定子ども園制度開始
2007年	平成19年	13			児童福祉法改正			学校教育法改正
2008年	平成20年	20			児童福祉法改正		現・保育所保育指針の改 定発表	
2008年	平成21年	10			子ども・若者育成支援推進 法		現・保育所保育指針の改 定実施	
2010年	平成22年	13	（現・養成カリキュラム） 改正告知			タイガーマスク運動のは じまり		
2011年	平成23年	10	現・養成カリキュラムの 実施		民法改正（親権の一部停止 等）	社会保障審議会児童部会 【社会的養護の課題と将 来像】発表		
2012年	平成24年	8			子ども・子育て関連3法公 布 児童福祉法改正（障害児施 設の統合）	雇用均等・児童家庭局長 通知【児童養護施設の小 規模化及び家庭的養護の 推進について】		
2013年	平成25年	5						

引用文献

- 1) 河野清志:保育学生の施設実習に対する自己効力感尺度の作成について、山陽学園短期大学紀要、42,29,2011.
- 2) 清水里美・吉島紀江・志澤康弘・藤本史:保育士養成課程における実習指導上の留意点-施設実習の事前指導における教育内容の検討-、平安女学院大学研究年報、13,19,2012.
- 3) 大坪邦資・濱田芳子・佐々木昌代:宮崎女子短期大学における保育実習に関する調査研究（1）-保育所を除く児童福祉施設で実施される-、宮崎女子短期大学紀要、27,41,2001.

参考文献

- 1) 小沼肇：保育士養成課程における福祉関連講座の役割に関する研究、武蔵野短期大学研究紀要、13, 37-49, 1999.
- 2) 安藤健一：保育士養成の施設実習に関する一考察～学生の実習アンケートから～、清泉女学院短期大学紀要、26, 47-56, 2008.
- 3) 相浦雅子・高濱正文・那須信樹・原孝成・野中千都：『保育実習指導のミニマムスタンダード』を軸とした保育所実習指導の実際に関する研究—九州管内保育士養成施設における保育所実習指導の実態調査を通じて—、別府大学短期大学紀要、27, 77-87, 2008.
- 4) 安藤健一：保育士養成課程における保育ソーシャルワークの可能性、清泉女学院短期大学紀要、28, 1-11, 2010.
- 5) 丹羽さかの：保育士養成課程に関する一考察—4年制大学における保育士養成課程の課題について—、白梅大学・短期大学 教育・福祉研究センター研究年報、16, 26-28, 2011.
- 6) 中山忠政：保育士養成課程における教科科目名称の変更「養護内容」から「社会的擁護」へ、ブール学院大学紀要、52,177-186,2012.